

第二次審査（論文公開審査）結果の要旨

A retrospective study of the clinicopathological characteristics of approximately 1,600 pilomatricomas treated at a single institution

単一施設での約 1600 個の毛母腫の臨床病理学的特徴の後ろ向き研究

日本医科大学大学院医学研究科 皮膚粘膜病態学分野
研究生 木下 侑里

Journal of Nippon Medical School. 2024 Aug 25;91(4):391-401.掲載

DOI: 10.1272/jnms.JNMS.2024_91-409

毛母腫は主に小児期および青年期に好発すると考えられている頻度の高い皮膚良性腫瘍である。しかし、今まで単一施設で1,000件以上の症例を解析した研究はなく、人種による特徴の違いなどに関しても詳細な報告は無かった。そこで、申請者らは毛母腫の臨床病理学的な特徴の詳細を明らかにするため、1,000件以上の症例を解析し、過去の国内外の報告と比較検討することにした。

2016年から2020年までに日本医科大学武蔵小杉病院の皮膚病理診断室において、毛母腫と診断された1,590件の症例を対象とした。臨床的特徴として、切除時の年齢、性別、部位、臨床診断、切除までの期間についてデータを集めた。また、病理学的特徴として、病変の深さ、毛乳頭様構造、トリコヒアリン顆粒、毛芽細胞、骨化、重層扁平角質細胞、薄桃色の大きな細胞質のある細胞の有無、形態学的な4つのステージ(1:早期、2:完全発達、3:早期退行、4:後期退行)について評価した。統計解析にはKruskal-Wallis test, Steel-Dwaaas testなどを用い、 $P<0.05$ を統計学的に有意とした。

男女比は1:1.6、最も頻度の高い部位は上肢(33.7%)だった。臨床診断は48.5%の症例で正しかった。切除時の平均年齢は33.5歳で、約70%の症例で腫瘍発見から1年以内に切除されていた。組織学的に、重層扁平角質細胞は全症例の41.7%に、薄桃色の大きな細胞質のある細胞は38.9%に、毛乳頭様構造は33.9%に、骨化は15.7%に、トリコヒアリン顆粒は11.9%に、毛芽細胞は7.8%にみられた。形態学的なステージ分類では3が最も多く(70.6%)で、1,2,4はそれぞれ0.9%、11.8%、16.7%だった。ステージが1から4に進むにつれて、切除までの期間が長くなった。また、それぞれの病理学的特徴は、いくつかの臨床的特徴と有意な相関がみられた。例えば、骨化は切除時年齢としては20~49歳、発症部位としては上肢、ステージ分類としては4と正の相関がみられた。

臨床的特徴として、過去の研究報告に比べて切除時の年齢が33.5歳と高く、本腫瘍は必ずしも小児期や青年期に好発するとは限らないことを示唆していた。女性に好発することには人種差はなかったが、欧米からの報告では頭部に好発するのに対して、本研究では上肢に好発していた。他の日本からの報告をみても上肢や顔面が好発部位に挙がっており、人種差を反映していると考えた。骨化が20~49歳に多くみられたのは年齢による細胞増殖活性の上昇、上肢に好発していたのはワクチン接種などによる外的刺激の増加、ステージ4に多くみられたのは腫瘍退行期に骨化が起こりやすいことと関連していると考えた。

第二次審査では、①多発例における臨床情報、②悪性化を示唆する病理学的所見の有無、③臨床診断が間違っていた症例の特徴、④女性に好発する理由、などに関して質疑がなされ、それぞれに対する的確な回答が得られ、本研究に関する知識を十分に有していることが示された。

本研究は単一施設で1,000例以上の毛母腫症例の臨床病理学的な特徴を詳細に解析した初めての報告であり、その臨床的意義は高いと考えられた。以上より本論文は学位論文として価値あるものと認定した。